

会報

2012.1.20

第57号

戦没船を記録する会

〒123-0864 東京都足立区鹿浜2-20-8
篠原国雄方

Tel・FAX:03-3897-6259 郵便振替001606-719515

URL:www.ric.hi-ho.ne.jp/senbotusen/

E-mail: senbotu@ric.hi-ho.ne.jp

目次

戦没船ビデオ4月完成へ……………	1
原発はこのままの体制でいいのか……………	1
平和のための埼玉の戦争展……………	2
大きな被害少ない記録……………	4
黒潮部隊について分かっていること……………	5
戦死の父親の洋上慰霊中 東日本大震災で夫を失う……………	6
編集後記……………	6

戦没船ビデオ4月完成へ

急ピッチの作製作業始まる

新年おめでとうございます。

会員各位の日頃のご協力に感謝し、今後一層の御支援をお願い致します。

一昨年来取り組んで参りました戦没船のDVD＝ビデオ作製の経過については、一昨年11月末までに本会がその内容となる原案を纏め、海員組合と協議して次の段階に進む事となっていました。原案を完成させる事が出来ず、昨年3月末までに完成する事に延期しました。

ところがその3月11日、思いもよらぬ東日本大震災で再び延期となりました。本会はその原案を6月末に完成させましたが、それをビデオに作るためには専門家の協力が必要であることから、海員組合の映画製作の経験もある「青銅プロダクション」(片桐直樹社長)に依頼、本会の原案を元に検討稿(案)＝シナリオ原案を作製、行程表、製作費見積書を揃え、本会の第17回定期総会に説明し、海員組合に提示しました。

この間海員組合は、東日本大震災で東北の6か所の組合支部事務所が、ほとんど全滅する被害を受け、被災組合員対策や支部組織・機構の再建に取り組み、また11月には八戸市で定期全国大会を開催するなど、大変多忙の時期でありました。

そのため海員組合の年度予算の関係などで、2度に渡って見積書の修正を行うなど、何回もの協議の結果、年末になってようやく合意し、1月5日に三者(海員組合、本会、青銅プロダクション)間の契約書の取り交わされ、戦没船のビデオ作製が動き出す事になりました。

ビデオ作製の日程は、1月は作製打合わせ等準

備期間、2月は撮影、記録資料等映像作製、3月は編集～仕上げ、4月は総仕上げで完成です。それまで、格段のご協力をお願い致します。

原発はこのままの体制でいいのか

1月11日は東日本大震災から10カ月目、多くの被災者は仮設住宅や避難先で、厳しい新年を迎えています。特に福島第一原発の事故は、私たちの想像をはるかに超え、放射能汚染はますます範囲を拡げています。そのため10万人に上る人たちが先の見えない避難生活を強いられています。

しかも原発事故の実態も、その及ぼす影響の大きさも不明で、原因の調査も全く進んでいないのに、早々と収束宣言が出され、原発再稼働や海外輸出までが言われ、運転期間原則40年を最長60年にする事まで決められようとしています。

そして、これだけの大事故を起こしたのに、政府も電力業界も政治家もだれも責任を取った人はおらず、安全保安院や原子力安全委員会なども同じ体制、同じメンバーが居座っている事は、何の反省もない危険な体制という外ありません。

この体制が放任されるならば私たちは、近い将来予測される大地震や津波に加え、経年劣化による原発の自壊事故による被曝や、帰る当てのない避難生活を覚悟しなければならぬのでしょうか。

第1回理事会開催告示

戦没船を記録する会 会長 川島 裕

本会の第17年度第1回理事会を下記によって開催いたします。以上

記

日時 2012年1月26日 14時より
場所 港区立港勤労福祉会館 会議室
議題 戦没船ビデオ作製について
その他

2011平和のための埼玉の戦争展に参加

未曾有の危機、 見直し迫られる人間社会

2011平和のための埼玉の戦争展は、7月28日～8月1日さいたま市浦和駅西口前のコルソ7階ホールで開かれた。

全体の概要

今回は、東日本大震災と東京電力福島第一原発事故により、未曾有の被害が発生した状況下で、これらに関する展示がなされ、関心も高く、13,000人の来場者があった。

8カ月に及ぶ学習・討議・企画・作業により『YES PEACE! えがおかがやく明日を!』をメインスローガンに、次のコーナーが設けられ、思考を凝らしたパネル展示が繰り広げられた。

- 東日本大震災が問いかけるもの
- 原発問題を考える
- いま、過去の戦争から学ぶもの
- 校史でつづる戦時下の教育と子どもたち
- 桶川飛行学校
- 埼玉の空襲
- 戦争への道 そのとき暮らし・教育は?
- 太平洋戦争の戦没船員・戦没船
- 沖縄戦の悲劇
- 沖縄・キャンプシュワブ・辺野古
- 沖縄の基地はいま
- 日本はアジア各地で...
- 広島・長崎の被爆の実相と人間展
- ビキニ事件と第5福竜丸
- 再び戦争と暗黒の時代を許さないために
- すみやかな戦後処理を
- 平和遺族会
- 暮らしから安保を考える
- 「世界の中の日米同盟」
- 「核兵器のない世界」をめざした
- 平和へと向かう世界の流れと日本の選択

本会の展示パネル

DVD作成準備等の関連もあり、本年は特定の課題を設けず、戦没船・戦没船員の概要を特徴点展示により

表示することとし、次のパネルを展示し解説に当たった。

- 1、海の平和を願って
- 2、太平洋戦争と船舶関係年表
- 3、太平洋戦争の戦況と漁船の哨戒区域
- 4、太平洋戦争における海域別戦没船数・戦没船員数図表
- 5、太平洋戦争における年月別戦没船・船員数の推移グラフ
- 6、太平洋戦争による日本船舶の被害表
- 7、都道府県別・所属別戦没船員数表
- 8、戦没船を記録する会船の年齢別分布表
- 9、ヒ86船団全滅一途の一滴より油の一滴
- 10、太平洋戦争中の船員募集新聞広告
- 11、戦没船アルフォト写真(15隻)
- 12、大久保画伯絵(7枚)
- 13、徴用小型船の任務等
- 14、徴用小型船写真(解説文付・6隻)

会場の様子・来場者の反応

今回の戦争展は東日本大震災・福島第一原発事故のアトだっただけに、全般に海上全般に震災、特に原発事故に関する話題が多かったようであるが、本会のコーナーでも話題となっていた。

- 特に原発事故の実態は明らかにされていないし、放射能汚染や被害は目に見えないので不安だ。
- 埼玉でも福島からの避難者が近くに避難してきており、幼児のいる家庭では関西以遠に非難しようかと真剣に考えた。
- 外国出張中の夫から、放射能害の虞のないところに非難せよとの連絡を受けたが、どうしたらよいか大いに悩まされた。



戦没機帆船の最近の調査について

大きな被害少ない記録

長崎市 西口 公章

少ない実態記録

太平洋戦争で兵士より死亡率が高かった船員だが、その実態の公的記録は少なく、社会的にも認知されていない。特に、小型船になるとほとんど記録が残っていない。機帆船もその船種の一つである。

今、私が把握しているものでは、公式な海軍の報告書の「戦闘詳報」で、山下近海機帆船「三河山丸」(107トン)と上田謙吉所有「第1大平丸」(200トン)の2例のみ。公刊物では、戦没船を記録する会編「知られざる戦没船の記録(下)」(拓殖書房)の報国近海機帆船「第88興国丸」(100トン)。そして私家版として、ドリアン戦友会「木造機帆船第5御崎丸」に、島仁蔵所有の同船の武装や戦闘状況が、乗船した陸軍兵により詳細に記録されている。

しかし、その他の大部分の機帆船は、戦没の年月日や場所が記録されている船はまだ良い方で、多くはその最後の状況が不明である。乗組船員が少ない上全員が亡くなっているからだろう。特に海軍より陸軍が徴用した機帆船が甚だしい。

会社や船の大小に関係はない。亡くなられた一人一人に家庭があり、かけがえのない家族があった。機帆船は、家族だけが乗組んだ船が多かったことでも知られている。戦争末期、船を失った船員が次に乗船した機帆船や新造の戦時型機帆船は、全国の広範囲の出身者で構成されていたが、家族が乗組んだ機帆船が航行中にそのまま徴用されたことも少なくなかったという。

困難な証言取得、関係文書収集に奔走

戦時標準型機帆船を造った父や戦時標準型機帆船など数隻の機帆船に乗った伯父を係累に持つ私は、機帆船に不思議な縁を感じ、戦争中の記録発掘に取り組んでいる。

しかし今日、残された乗員から直接証言を得るには、時間的にも距離的にも私には不可能なので、公刊物や私家版の戦記や証言集が唯一の頼りである。新刊の本屋から古書店、チェーンの新古書店、さらに各地の古書店の古書目録からも購入、図書館も利用してい

る。内容が見れるのは直接確認、古書はカンが頼り。探すのは乗組員以外の方が見た機帆船の記述である。

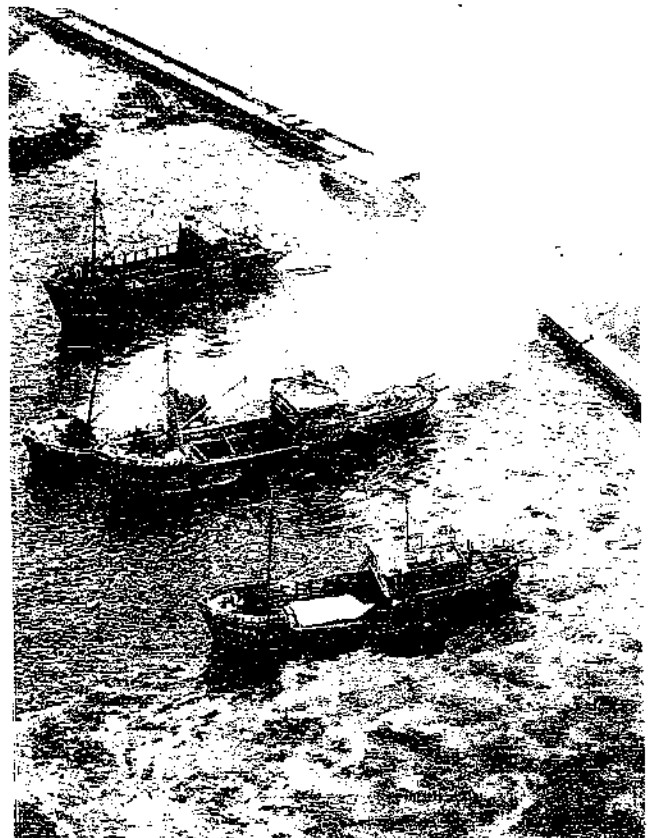
たとえば、固有船名がなくとも「機帆船」の文字が一つでもあれば、また船になじみのない人の書かれた記録の中の「木造船」や「小船」もキーワードにして購入している。船名とそこに書かれた船の周辺の状況を他の手持ちの資料と照合し、固有船を割り出して行くのである。

貴重な先達の研究文書

照合する戦時中の機帆船に関する資料には、複数の艦船研究者から託された当時の陸海軍の貴重な断片史料がある。

刊行物では、船舶部会横浜の提供と私が集めた昭和16~22年版の「日本船名録」の原本とコピー。戦没船を記録する会提供の「戦時小型船名簿」。戦前船舶研究会の「戦時船名録」、正岡勝直「日本海軍特設艦船史」、林寛司「日本海軍徴用船舶原簿」、戦没遺体収揚委員会「太平洋戦争沈没艦船遺體調査大鑑」、そして、20トン以下の機帆船も収録の宮本三夫著「太平洋戦争 喪われた日本船舶の記録」等がある。

太平洋戦争末期、機帆船の航跡は全戦域にくまなく印されている。機帆船は海運立国だった日本の最後の



八戸港で攻撃を受ける戦時標準型機帆船群(米軍資料)

頼みの綱だった。ここ2、3年に発行された戦記類もそれを証明している。

例をあげてみよう。

1、千島列島

大野芳「8月17日ソ連軍上陸す」(2010年・新潮文庫)に、占守、幌筈島で活動した機帆船団。婦女子の緊急本土引揚げにも使用。上空からみた霧の中にマストを見せる機帆船団の印象的なシーンがある。

2、大東群島

森田芳雄「ラサ島守備隊記」(2011年・光人社NF文庫)に、ラサ島(沖大東島)等大東群島への軍事輸送や民間人引揚げに使用された機帆船。

3、沖縄・八丈島

本土決戦記「丸」編集部「沖縄血戦記録」(2011年・光人社NF文庫)に、両島周辺の輸送に使用の機帆船(第〇〇梅丸、100トン型戦時標準型機帆船)。下田～八丈島間の陸軍兵士輸送の状況がある。

4、ニューギニア

①越智春海「ニューギニア決戦記」(2011年・光人社NF文庫)に、同島で陸軍の補給輸送に活動中の機帆船が米魚雷艇からの攻撃で被害。

②久山忍「鬼哭の戦場」(2011年・光人社)に、東ニューギニアで、陸軍部隊の移動に使用されていた2隻の機帆船が、航空機の攻撃を受け1隻はガソリンに引火し爆沈、1隻が小破・座礁。

5、ビルマ

後藤氏「ビルマ戦記」(2011年・光人社)に、マレー半島沿岸で陸軍輸送に使用される機帆船群。方面軍の参謀だった著者が、連絡機から島影伝いに進む機帆船を見て、無事を祈るシーンがある。

6、日本国内

最近、古書店から入手した資料では、本土での海軍使用中の戦没の例として、兵庫県学校厚生会編「郷土の空襲」(東播・淡路)に、宝塚航空隊の予科練習生を乗せ、淡路に向かっていた機帆船「住吉丸」(トン数不明)があるが、「住吉丸」の同名船は、はなはだ多く、調査を進めて行きたい。

本会への問い合わせ

黒潮部隊について 分かっていることを

<問い合わせ>

「黒潮部隊」で戦没した船や船員の中には、東日本大震災被災地と関係あるケースが大部あるようだが、「黒潮部隊」について参考になることを知りたい。

<返信> (紙幅の関係で概要掲載)

特設監視艇の概要

太平洋戦争中、洋上哨戒をする監視船が大量に必要なになった海軍は、外洋航海が可能な漁船等の船舶を「特設監視艇」に指定して徴用し、海軍第22戦隊(黒潮部隊)や各地の根拠地隊に所属させた。

この特設監視艇(監視艇)は海軍艦艇として軍艦旗を掲げ、無線機を装備して、敵艦や軍用機の監視任務にあたった。戦況に応じて北洋から順次四国南方洋上へと監視場所(本土東方洋上哨戒線・東哨戒線・南哨戒線・西哨戒線)を変えつつ、赤道までその活動は広範囲に及んだ。

武装は、戦争初期は小銃のみ、中期には7.7mm機銃と迫撃砲を追加、後期には25mm対空機銃や13mm単装機銃・電探・若干の爆雷なども装備されたが、この程度の武装では、敵に遭遇してもまともに戦うことができず、多くの監視艇が敵発見の無電を発しながら撃沈されていった。

戦争中、この監視艇として徴用された船舶は少なくとも411隻、その内の209隻が乗っていた軍人や軍属の漁師たちの命と共に失われた。

戦時下の日本の船員たちの悲劇をまとめた書籍

「日本郵船戦時戦史」の文中には、「まことに弱い運命のもとにおかれた彼らは進んで戦う何ものも与えられておらず、ただ小さな船のなかでじっと死の来るのを待っているばかりであった。(中略)敵に会っても、そのなすがままに死なねばならないことは、軍人以上の精神力を必要とした」とある。

第23日東丸の場合

1942年4月当時、第22戦隊と第1～3監視艇隊をもって編成された北方部隊哨戒部隊哨戒隊は、釧路を基地として三直交替で東方洋上哨戒線(東経155度)を連日哨戒中であった。

4月8日以降、第23日東丸を含む10隻の第2監視艇隊(第2哨戒隊)は、本土東方700哩(36N～

39N 付近)において、通常哨戒任務に従事していたが、4月17日 敵情により33Nまで南下、次直の第3哨戒隊と同日夜半交替し、整備補給のた銚路基地に向け帰投の途についた。

4月18日 「第23日東丸」は、哨戒線の西方100哩の北緯36N 152-10Eの地点で、突如次の電報を発信。

「敵艦上機3機見ユ 地点タレ天捉153度20分」

「敵飛行機3機 進路南6度西 0630」

「敵船空母艦2隻見ユ 0645」

「駆逐艦ヲ伴フ空母2隻南西二向フ 0645」

「敵空母3隻見ユ 0650」

「敵飛行機2機見ユ 0830 ?」

最後に「敵大部隊見ユ」と報じたまま消息を断った。

当日は、天候は半晴、海上は15mの風が吹き、視界は9,000mと良好であった。

米軍は日本軍の真珠湾攻撃の報復を計画、当初は、4月18日午後の本州沿岸500哩の地点で、B25爆撃機16機の空襲部隊を「ホーネット」から発進させ、夜間13機が東京地方に集中し、他の3機は近道をとって、名古屋・大阪・神戸を攻撃し、翌日明るくなってから中国の飛行場に着陸する計画を決定、訓練中であった。

しかし、第23日東丸の電報をキャッチし、日本軍がこのような遠距離の洋上に哨戒網を張っていることの驚き、当初予定地点より150哩手前から7~8時じにかけ攻撃隊を発進せ、日本爆撃も昼間に変更せざるを得ない結果となった。

第23日東丸の電報を受けた日本は、事前の対応ができ、被害を軽減できたが、米軍の監視艇への攻撃は18日1635頃まで続く。

米軍記録によると、「0753米軽巡900ヤードの距離にて主砲の奮射」を皮切りに、艦上爆撃機も含めての猛攻を加える。第23日東丸の応射は我が方に届かず、やがて銃弾は尽き、船体は蜂の巣のようになる。0837敵生存者の救助に向い救助しようとするも拒否される」とある。日本の記録にも「敵機を発見してから沈没したと推定される0830頃まで6通の敵状報告を行い、14名の乗員は敵の救助も拒否し、全員艇と運命を共にした」とある。日本の記録にも「敵機を発見してから沈没したと推定される0830頃まで6通の敵状報告を行い、14名の乗員は敵の救助も拒否し、全員艇と運命を共にした」とある。

<その他の監視艇の損害>

沈没=第23日東丸、長渡丸。

大破(船体放棄)=長久丸、第21南進丸、第1岩手丸。中・小破=興和丸、第3千代丸、栄吉丸、第2旭丸、第26南進丸、海神丸。戦死者=33名。負傷者=23名。

戦死の父親の洋上慰霊中

東日本大震災で夫を失う

太平洋戦争の開戦から12月8日で70年。東日本大震災の被災地・宮城県気仙沼市に「大震災」と「戦争」を特別な想いで重ね合わせる女性(72)がいる。

女性の父親は、乗船中の「第7号正栄丸」(黒潮部隊所属)で敵艦の洋上監視活動中、1944年6月、千葉県沖約800キロの太平洋上で米潜水艦と交戦中、父親ら乗組員23名全員が戦死した。女性が5歳の時だった。

それから67年。女性は東日本大震災の日、太平洋上にいた。日本遺族会が主催した洋上慰霊祭に参加して、33歳の若さで戦死した父を偲んでいた。その航海中息子から船舶電話で、気仙沼に残してきた夫が行方不明になったと連絡が入り、帰国後、夫は遺体で見つかった。

「戦争も震災も恨みます」女性は、父と夫のが眠る墓石を何度もさすりながら、涙ながらに語った。

(11年12月8日北海道新聞夕刊から要旨抜粋)

編集後記

前号から半年以上たって57号発行となったことをまずお詫びします。DVD作成について7月21日の定期総会翌日、海員組合に最初の提案をしましたが、計画(費用見積りも)が巨大すぎるとして修正が求められ、その後2回にわたり修正案を作り直し協議を重ねた結果、昨年末に合意に達し、今年1月5日に契約書調印となりました。この事案にひと区切りがついて、次の段階に進む時に会報発行をと思っていたため、ようやく発行となりました。

戦没船ビデオの内容は、予算の関係で海外ロケや動画の使用は大きく制限されるので、当初の計画は変更を余儀なくされています。とくに戦争体験者の高齢化で、体験を語ってくれる証言者探しには苦労しました。そして、開戦当初のマレー半島上陸作戦とか、ガダルカナルやレイテへの特攻輸送船の証言を得る事などは到底不可能なことです。

それだけ戦争から遠く離れた時代になった訳ですが、だからこそこのビデオは貴重な資料であると思うので、最善の努力を尽くすつもりです。(篠原)